

## 研究プロジェクト成果報告書

研究課題 「子供が創造的・実践的に学ぶ教育課程の創造」

研究期間 平成26年度～平成27年度

研究代表者 上越教育大学附属小学校 校長 越 良子

### 研究組織

氏名	所属・職名	役割分担
越 良子	附属小学校・校長	研究代表者；研究の総括指導
中島 秀晴	附属小学校・副校長	研究分担者；実践研究の総括
青木 弘明	附属小学校・教頭 他 教諭17名	研究分担者；研究の立案、評価
梅野 正信	上越教育大学・教授 他 大学教員16名	研究協力者；理論的、専門的見地からの指導
丸山 美貴	上越教育事務所指導主事	研究協力者；県行政の見地からの指導
磯野 正人	上越市大手町小学校・教諭 他 公立小学校教諭20名	研究協力者；公立校からのデータ収集、活動構 想検討

## I 研究プロジェクトの内容

### 1 教育課程

#### (1) 編成した教育課程の特徴

##### ①教育課程の理念

当校では、人間が人間としてよりよく生きるための教育、すなわち「人間教育」の視点に立ち、子供が、自らの意志で未来を切り拓きながら、社会的存在として生きるための学校づくりを目指している。これまで生活科や総合的な学習の時間を中心に研究に取り組み、子供の生活や生き方に迫るような、本質的で実感のある活動として総合単元活動（1年～3年）、総合教科活動（4年～6年）を行ってきた。そこでは、子供は総合的・実感的に学び、人間としてよりよく生きる力を育んできた。

しかし、総合単元活動、総合教科活動と教科学習との関連については不十分であり、特に教育課程レベルでの研究が課題として挙げられていた。また、「感性」は「知性」と相補的に働きながらよりよい「自分」をつくる土台と考え、「感性」は、あらゆる教育活動において重要と考えた。そこで、「感性」を培うことを大切にしながら新たな教育活動（「創造活動」「実践教科活動」「実践道徳」「集団活動」）を実施し、それぞれの活動の関連を図った教育活動を編成することによって、社会の様々な課題に対して、主体的に関わり、他者とともによりよい解決を求めていく力を育み、変化の激しい社会をよりよく生きる子供を育てることができると考えた。

教育課程の中核に位置付けられるのが「創造活動」である。創造活動は、子供が学校生活においてかけがえのない「今」をよりよく生き、「人・もの・こと」との出あいから生まれる学びを広げていく教育活動である。子供の学びのつながりや広がりを考え6年間を通してよりよい自己の生き方を考えていく。創造活動を教育課程の中核に位置付け、体験活動を充実することで、創造活動の充実だけでなく、他の教育活動の充実も図られるものとする。

社会の様々な課題に対して、主体的に関わり、他者とともによりよい解決を求めていく力として、分野横断的に物事を考え創造性を発揮して学ぶ力、物事を俯瞰したり焦点化したりしながら主体的に学ぶ力、他者と協力しながら課題に対して最善解を導き探究的に学ぶ力が挙げられる。これらは、これからの社会を生きていく子供たちに求められる教育活動全体を通して育成したい資質・能力である。研究にあたっては、これらの資質・能力を子供の姿で、具体的に想定することが大切であると考え、これらの資質・能力と具体的な資質・能力との関係を次のように設定した。

<3つの資質・能力と具体的な資質・能力について>

<3つの資質・能力>	<具体的な資質・能力>
分野横断的に物事を考え創造性を発揮して学ぶ力	① 経験を結び付けながらアイデアを生み出す力
物事を俯瞰したり焦点化したりしながら主体的に学ぶ力	② 部分だけでなく全体を見渡して自らの意思で行動・判断する力
他者と協力しながら課題に対して最善解を導き探究的に学ぶ力	③ 他者と協力しながら実感の伴う解を探る力

このような資質・能力は、子供が「感性」を働かせながら活動し、その中で学ぶことによって育まれると考える。当校では4つの教育活動を通して、①③の資質・能力を育むことを目指す。

また、「感性」については、「包括的・直感的に行われる心の動き及びその能力であり、知性と相補的に働きながら、よりよい『自分』をつくる土台となるもの」と定義した。また、「本能的・直感的な受動的な能力だけでなく、人間の行動を生み出す能動的な価値判断能力を含むもの」と位置付けた。そして、「知性」と「感性」の両輪で子供を育てようと考え、「感性」を教育課程づくりに位置付けることにした。

1年次研究では、子供が獲得するであろう資質・能力の根底にある「感性」を培うことを重視した。「感性」を培う研究を進める中で、「感性」を働かせている子供の姿をありのままに捉え、よりよい「自分」をつくっている子供一人一人を評価することを大切にしたいと考えるようになった。

そこで、2年次研究では、「感性」の働きに着眼し、4つの教育活動の構想・展開の在り方を問い直した。私たちは、子供が「感性」を働かせながら活動し、その中で学ぶことによって資質・能力が育まれると考えている。子供は、心から感動しているとき、「人・もの・こと」とつながろうとするとき、真剣に物事を考え、作りだしているときなどに感性を働かせている。子供が感性を働かせながら活動する中で本物の問いが生まれ、子供は思考し、分析したり、判断したりする。子供は、体験を広げる中で、知識と行為をつなげ、自ら価値を見付けたり知識、技能を身に付けたりしていく。

子供たちは、知性と感性を両輪として働かせる中で、分野横断的に物事を考え創造性を発揮して学ぶ力、物事を俯瞰したり焦点化したりしながら主体的に学ぶ力、他者と協力しながら課題に対して最善解を導き探究的に学ぶ力を獲得していく。

## ②新設した教育活動について

### ア 創造活動（第1～6学年）

子供が、学校生活においてかけがえのない「今」をよりよく生き、「人・もの・こと」との出あいから生まれる学びを広げていく教育活動である。

創造活動では、「感性を働かせて、身近な自然や社会、文化と関わり、自分を取り巻く「人・もの・こと」とつながる活動を通して、子供自ら学びをつくり、深めながら、これからの社会を生きていく子供たちに求められる力を育成するとともに、よりよい自己の生き方を考えることができるようにする」ことを目標とする。

### イ 実践教科活動（第1～6学年）

子供が、様々な教科・領域の経験を結び付けながら体験的に学んだり、切実な課題意識の基、総合的・横断的な視点から学んだりするための教育活動である。その際、既存の教科等の枠組を踏まえながら、教師が捉える教科の本質を基に構想・展開する。

実践教科活動では、「感性を働かせて、その教科ならではの『人・もの・こと』との関わりを深め、自らの方法で生きて働く知識や技能を身に付けていく過程で、ものの見方や考え方を広げながら、これからの社会を生きていく子供たちに求められる力を育成するとともに、よりよい自分をつくる」ことを目標とする。

### ウ 実践道徳（第1～6学年）

子供が他者の定めた価値に従って生きるのではなく、自らの意志で行動・判断しながら、よりよい共同体を営む人間としての生き方をつくっていく教育活動である。

実践道徳では、体験を通じた実感を基に、子供の内側からつくられる道徳的な価値観を大切にするとする。

実践道徳では、「感性を働かせて、身近な生活における様々な「人・もの・こと」との関わりから得た実感を基に、道徳的な価値観をつくり、つくり変えることを通して、自らの在り方や生き方を探りながら、これからの社会を生きていく子供たちに求められる力を

育成するとともに、自らの生き方についての考えを深め、実践意欲と態度を養う」ことを目標とする。

## エ 集団活動（第1～6学年）

子供が他者との関わりをつくりながら、よりよい自分をつくっていくことを大切にす  
る教育活動である。

集団活動では、「感性を働かせて、他者との関わりをつくり、集団での活動をよりよ  
くしようとする過程で、これからの社会を生きていく子供たちに求められる力を育成すると  
ともに、自らの生き方について考えを深め、自己を生かす能力を養う」ことを目標とす  
る。

### (2) 教育課程の内容は適切であったか

#### ① 「感性」を培うことについて

子供は、「人・もの・こと」を感知・感受し、それらに働きかけながら文化的価値に  
迫っていた。子供は、4つの教育活動において、「感性」を働かせながら、自分の思考  
や行動をつくり、よりよい自分をつくっていった。

#### ② 創造活動を中核に据える教育課程について

創造活動で年間を貫く大単元を設定したことで、子供は自分の思いや願いを基に活動  
をする過程において、目的を共有した他者とともに活動をつくり、つくり変えながら、  
学級の目的やその実現に向けて取り組んだ。教育活動に中核があることで、そこから学  
びが広がったり深まったりし、子供にとって必然性のある実践教科活動や実践道徳の取  
組が行われた。

まず、実践教科活動との関連では、創造活動での体験が実践教科活動での学びにつな  
がった。例えば、創造活動で山歩きをテーマにした学級では、目的地となる山を選ぶ際  
に地形図から山の様相を読み取るという必要感から、等高線に着目し地形図を読み取る  
実践社会科との関連を図ったり、山の天気について事前に調べるという必要感から、風  
の強さや雲の動きに着目し天気図を読み取るという実践理科との関連を図ったりした。  
また、創造活動で森をテーマにし、森で炭焼きを行った学級では、炭について探究する  
中で、炭電池をつくるという実践理科との関連を図った。創造活動との関連を図り、直  
列や並列といった既習内容とも結び付たことで、電流の学習が広がり深まった。

実践道徳との関連では、教育活動の中核である創造活動での実体験から生まれる問題  
(内容項目)について、自分の考えを述べたり、話し合ったりする中で、子供が自らの  
道徳的な価値観をつくったり更新したりしていった。例えば、先の山歩きをテーマにし  
た学級では、山歩きの苦しさから、実践道徳で「山を歩くということ」について話し合  
い、「苦しいからこそ喜びがある。頂上で見る景色は疲れを吹き飛ばしてくれる」「我  
慢することで自分が強くなれる気がする」など、山を歩くことに対する捉えを広げた。  
また、食をテーマにした学級では、普段当たり前前に食べていることを見つめ「食べる  
ということ」について話し合い、「食べるって自分だけのことではない」「何気なく食  
べていたけれど、料理は作る人と食べる人をつないでいる」など、食に対する考えを深め  
た。

創造活動を中核に添えたことで、子供にとって必然性のある活動となるだけでなく、  
子供自ら活動をつなぎ、学びを広げ深めていく姿が見られた。

#### ③ 新設した4つの教育活動（「創造活動」「実践教科活動」「実践道徳」「集団活 動」）について

## ア 創造活動

子供は、創造活動を通して、「今日こそこれをしたい」「明日は学校でこれをやりたい」など、今日の活動を楽しみにしながら登校したり、明日の自分を思い描いたりした。学校生活に中核があることで、子供は、仲間や教師とともに生き生きと学び、学校生活を充実させた。

特に、今年度、創造活動の各学年の目標について、子供の発達段階や興味・関心を踏まえて見直したことで、各学級で子供の実態に応じた活動が構想され、子供と教師でつくる活動が繰り広げられた。子供は、身近な自然や社会、文化に感性を働かせて繰り返し関わり、自分を取り巻く「人・もの・こと」とつながる活動を通して、自ら学びをつくり、深めていった。その中で、創造性を発揮して学ぶ姿や主体的に学ぶ姿、探究的に学ぶ姿が見られた。

創造活動の充実は、創造活動から実践教科活動や実践道徳、集団活動へと学びが広がるなど、他の教育活動の充実にもつながった。

## イ 実践教科活動

1年次研究において「従来の教科の枠組を統合したりするなど、新たな教科の枠組をつくる必要がある」と考えていたが、研究を進める中で、既存の教科の内容を関連させることだけを手がかりに活動を構想すると、表面的で強引な結び付けに陥り、子供の求めに寄り添えず、かえって活動が狭くなってしまふことが分かった。したがって、既存の教科のコンテンツをつないで活動をつくりながら新たな教科の可能性を探るのではなく、各教科の本質を捉え、教科ならではの「人・もの・こと」との出あいから生まれる探究を広げることを通して、各教科における知識や技能を体得しながら、子供のよりよい自分づくりにつながる活動を目指したいと考えた。

実際、魅力ある「人・もの・こと」との出あいから、子供は知りたい、やってみたい、調べてみたい、試してみたいという強い思いや願いをもった。そして、自らの方法で生きて働く知識や技能を身に付けていく過程で、ものの見方や考え方を広げていった。その中で、創造性を発揮して学ぶ姿や主体的に学んだり、探究的に学んだりする子供の姿が見られた。

## ウ 実践道徳

創造活動から生まれた問いや、子供の生活から生まれた問いなどについて、身近な生活における様々な「人・もの・こと」との関わりから得た実感を基に、道徳的な価値観をつくり、つくり変えていく子供の姿が見られた。また、自らの在り方や生き方を探りながら、自らの意志で行動・判断する子供の姿が見られた。

## エ 集団活動

他者との関わりをつくり、集団での活動をよりよくしようとする過程で、創造性を発揮して学ぶ姿や主体的に学ぶ姿が見られた。また、他者との様々な関わりから、自らの在り方や生き方について考えを深めていく子供の姿が見られた。

## (3) 授業時間等についての工夫

当校の授業時間(校時)では、30分モジュールを導入している。通常、午前中に6モジュール、午後1～3モジュールの授業を行う。今年度は、第1学年で週あたり38モジュール、第6学年で45モジュールの授業を行っている。

通常の45分授業の場合、低学年の子供にとっては、やや授業時間が長すぎて学習意欲が持続しない。一方で、多様な表現活動や体験的な活動を取り入れた授業の場合、授業時間が足りなくなることがしばしばある。

その点、30分モジュールは、必要に応じて複数のモジュールを連続させることで、子供の発達特性や学習内容に応じて柔軟な授業の設定が可能である。当校では、体験的な活動を重視しているため、校外へ活動に出掛けたり、外部講師を招いて活動したりすることも多い。子供の活動、探究、思考の流れを時間によって分断することなく継続することができ、学習の効果を上げることができる。

一方で、時間変更が起こることが子供の生活リズムの乱れにつながることも考えられる。モジュール制が子供の生活・身体に与える影響などについては、今後検証していく。

## 2 指導方法・教材等

### (1) 実施した指導方法等の特徴

創造活動を中核とした4つの教育活動で大切にしたい指導方法等は以下の4点である。

- ・学級の独自性をもたらす、教師の専門性を生かした単元構想
- ・一人一人の思いや願いを実現できる時間と場の確保
- ・自分の手と心と頭を使いながら試行する場の保障
- ・子供の思いや願い、必然性を見取りと、それに寄り添った単元の構想・展開

### (2) 指導方法等は適切であったか

#### ① 創造活動の指導方法・教材等

- ・学級の独自性をもたらす、教師の専門性を生かした単元構想について  
子供の1年間の学びを緻密に思い描き、子供が学びを自らつくり続けていくことができる教材を選定し、構想・展開を考え実践した。そのことにより、子供は自分の思いや願いを十分に発揮しながら、自ら学びをつくり深めることができた。
- ・一人一人の思いや願いを実現できる時間と場の確保について  
他の教育活動との関連を図りながら時間と場所を確保した。年間を通してつながりをつくってきた「人・もの・こと」について深く考える山場となる活動を思い描きながら、時間と場を確保していくことが今後の課題である。
- ・自分の手と心と頭を使いながら試行する場の保障について  
教師が子供に出あわせたい「人・もの・こと」を十分に吟味しながら、体験活動を構想、展開をし、子供の「動いて、考え、また動く」という活動を大切にしたい。そのことにより、子供が教師の構想を超える活動をつくり、よりよいものにつくり変えていく子供の姿が見られた。
- ・子供の思いや願い、必然性を見取りとそれに寄り添った単元の構想・展開について  
「感性」を働かせながら、「人・もの・こと」とつながりを深くもつ単元を構成・展開をした。そのことにより「今」を充実させ自分の生き方につながる考えをつくり、つくり変え、つくり続けている姿が見られた。息長い活動のため、山場となる活動を取り入れたり、目的意識や相手意識を自覚するような場を設けたりしながら子供とともに活動をつくり、つくり変えていく必要がある。年間を通した子供一人一人の創造活動での学びの見取りについては課題がある。

#### ② 実践教科活動の指導方法・教材等

- ・学級の独自性をもたらす、教師の専門性を生かした単元構想について  
教師の専門性を生かし、教科の本質に迫る活動を展開した。創造活動との関連を子供が自らつくりながら、教科の学びを広げていく姿が見られた。
- ・一人一人の思いや願いを実現できる時間と場の確保について

子供は教材に働きかけ、また働きかけられながら、教材とのつながりを深め、教科の本質を基に自分の考えをつくっていった。

- ・自分の手と心と頭を使いながら試行する場の保障について

様々な教科・領域の経験を結びつけ、「感性」を働かせながら、体験的に学ぶようにした。そのことにより、その教科の目標を実現するとともに、学びを生活とつなげたり、自らの創造活動との体験とつなげたりしながら、学びをつくる姿が見られた。

- ・子供の思いや願い、必然性を見取りと、それに寄り添った単元の構想・展開について

子供の経験と学びがつながる単元を構想し展開した。そのことにより、思いや願いを發揮しながら、課題に対して自分の考えをつくり、つくり変えながら、教科ならではの知を確かなものにした。

## ア 実践国語科

豊かな言語生活をつくる活動を思い描いた5年「実作『少年探偵』」では、江戸川乱歩の「少年探偵」シリーズを読みながら、登場人物の設定や、ストーリー展開の仕方を活用して、「上越に怪人二十面相が現れたら」との設定で自分の「少年探偵」新編を書く活動である。子供は自分で書くために、何度も読み返すことで、ストーリー展開の特徴、トリックのアイデア、読み手を引き付ける工夫を捉えていき、自身の実作に生かした。

## イ 実践社会科

社会における人の営みの意味を探る活動を思い描いた4年「地図紀行」においては、子供は、山歩きの目的地の高低や移動ルート、移動距離、移動時間、周辺の様子などを地図から予想し、予想したことを、実際に自分で歩いたり、自分で見たりすることで実感していった。子供は、実際に目的地を訪ねることから、地図を見て調べる必然が生まれ、熱心に情報収集をすることになる。地図上を歩くことと、実際に現場を歩くことを繰り返す中で、子供は地図を読めるようになっていくとともに、地図の見方を広げていった。

## ウ 実践算数科

数理のよさを実感する活動を思い描いた1年「もっと知りたい1年2組」では、友だちのことや学級全体のことを知る中に、算数的活動があるという考えから活動がうまれた。子供が、友だちの好みの色や食べ物等を調べる活動を通して、ものの個数の分類、整理、分析する必要性を感じる時、個々の情報から、学級全体の傾向をつかむことができるよさを子供は自ら味わった。

## エ 実践理科

科学的事象とのかかわりをつくる活動を思い描いた5年「スッキリラボ」では、原木を含む木材の特徴を感覚的、分析的に知ることを通して、日常生活に生きる判断力を身に付けながら、植物の見方・考え方を広げる活動である。子供は観察や接触で見分けられる特徴とともに、燃焼や炭化での特徴の情報を統合しながら見分けていった。身体性を發揮するとともに科学的な分析情報を統合し、判断する際には協働性も發揮する。揺れ動く中で感覚を越えた、本質的な判断を行う姿が見られた。

## オ 実践音楽科

音楽する楽しさを味わう活動を思い描いた4年「音しばい」では、活動を通して子供は物語に触れ、絵を描き、音をつくる。また、「音しばい」は今ある何かの作品を再現するのではないため、子供は試行錯誤をしながら「よりよいもの」にしようと挑戦

し続ける。実践図画工作科、実践国語科とも関連しながら活動を進めた。

#### カ 実践図画工作科

自分らしい造形表現の楽しさを味わう活動を思い描いた2年「ウォーターファンタジー」では、水に働きかけることで生まれる感覚を生かしながら、つくりたいものをつくる活動を通して、「どきどきファンタジー」をつくり変える楽しさを味わう活動である。実践図画工作科では、様々な自然素材に働きかけることで生まれる感覚を生かしながら、つくりたいものをつくる造形活動を重ねてきた。

#### キ 実践家庭科

よりよい家庭生活についての見方・考え方をつくる活動を思い描いた5年「みんなのキッチンデイズ〜ミラクル小麦」では、創造活動「ミラクルシェフ」での調理活動から生まれた疑問や問題を友だちと考え解決することを通して、食に対する考え方を広げるとともに、友だちとのつながりを深めていく活動である。薄力粉、中力粉、強力粉の3種類の小麦粉を使った調理活動を通して、小麦粉の違いや、それぞれの料理に適した小麦粉の選択などを考えた。小麦粉の特徴を知った子供は、「小麦粉って面白い」「小麦粉を使った料理をもっと作ってみたい」という思いをもち、今後に生かそうとした。

#### ク 実践体育科

よりよい動きや体をつくる活動を思い描いた6年「ストリートダンス」では、ダンスすることを通して、心と体をひらきながら、運動する楽しみや人と交流する喜びをつくる活動である。子供はプロのダンサーと出会い、ダンサーのダンスを見たり、話したりすることを通して、ダンスの魅力を感じた。子供は、自分や他者を見ながら「どのくらい動いているのか」という意識の基、振り付けを学ぶ。そして「動きたいから動く」といった、自分の内側から湧き出る感覚を大切にしながら活動していた。

#### ケ 実践外国語科

異なる言語や文化とのかかわりをつくることを思い描いた6年「お国言葉で」では、外国の人と関わりながら外国の文化を体験したり、様々な外国語に触れたりすることを通して、外国や外国語に親しみ、世界とつながりをつくる活動である。本活動で対象とする外国語は、英語だけに限らない。子供は、自分の興味や出会った相手の言葉など様々な外国語にふれる。未知の言葉に触れることを楽しみながら、自分で調べてみようとする姿勢を大切にされた。また、多くの言葉と出会い、多くの相手と出会う中で、相手と自分をつなぐ英語の役割について考えていくようにした。

### ③ 実践道徳の指導方法・教材等

- ・学級の独自性をもたらす、教師の専門性を生かした単元構想と、一人一人の思いや願いを実現できる時間と場の確保について

子供が考える必然性があり、かつ教師が子供とともに考えたいと思える問いを、創造活動や実践教科活動などの子供の「今」の活動の中から見だし、それを教材とした。その問いは、子供にとっても教師にとっても、学級をつくる上で必然性があり、子供は体験を通じた実感を基に、深く考え、自分の中の道徳的な価値観をつくり、つくり変えていった。自分を見つめ、自分の生き方について考える子供の姿が見られた。

- ・自分の手と心と頭を使いながら試行する場の保障について

子供は創造活動での体験と実感を基に、目の前の問いに対して深く考えていくことのできる場を設定した。自分の考えを友達に伝え、考えを確かにしていく子供の姿が見られた。自ら深く考えるからこそ、沈黙したり、言葉として表現できなくな

ったりするという子供の姿も見られた。

- ・子供の思いや願い、必然性を見取りと、それに寄り添った単元の構想・展開について  
子供は自分を見つめ、自分の在り方や生き方について、考えを自ら深めていく、問いの必然性に着目し単元を構想し展開した。子供に問うタイミング、子供とともに考える時間、問い方や言葉の吟味等について検証することが課題である。

#### ④ 集団活動の指導方法・教材等

- ・学級の独自性をもたらす、教師の専門性を生かした単元構想について  
子供が学級や学年を超えて協力することや仲良くすることの価値を、子供が自ら獲得していけるようにした。子供の中に入りともに活動したり見守ったりする等、教師の立ち位置を考えながら活動に取り組んだ。子供が自分の思いや願いを活動に反映させ、他者とともに楽しみながら自らの生き方について考えていくことにつながった。
- ・子供の思いや願い、必然性を見取りと、それに寄り添った単元の構想・展開と、一人一人の思いや願いを実現できる時間と場の確保について  
各学年が企画する「ふれあい集会」は、子供の思いや願いが反映できる機会をあらかじめ設定しておいた。そのことにより、創造活動において楽しかった体験や思いを、全校の子供にも自分たちと同じような気持ちや楽しさを感じてもらえるような集会活動を企画・運営した。子供たちは、学年とのつながりだけでなく、創造活動を中核としながら、他学年とのつながりもつくっていた。一方、プレイングチーム（縦割り班）での日常における清掃活動については、つながりをさらに深めていけるような活動にすることが課題である。
- ・自分の手と心と頭を使いながら試行する場の保障について  
「音楽集会」では、各学級でダンスや振付を考える活動を設定した。そのことにより、子供は創造性を発揮し活動に意欲的に取り組み、集団の中で自分を生かすことができた。

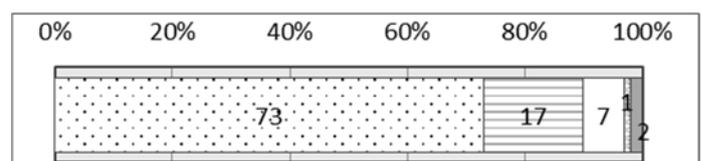
## Ⅱ 実施の効果

### 1 児童・生徒への効果

#### (1) 児童アンケートより

##### ① 創造活動に関するアンケート項目

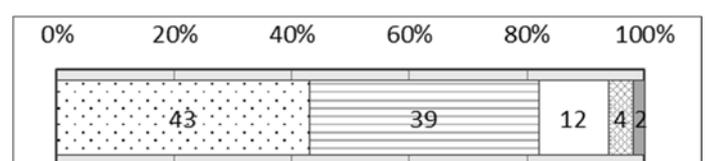
「学級の活動で『おもしろい』『やってみよう』と思うことができた。」



この質問に対して「はい」「どちらかといえばはい」と回答した子供が9割となっている。創造活動が契機となり、「やってみよう」という次の活動の原動力を抱く子供が多いことがうかがえる。

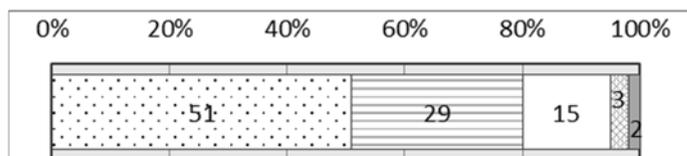
##### ② 実践教科活動に関するアンケート項目

「授業で『もっと知りたい』『もっとよくしたい』と考えながら活動する。」



この質問に対して「はい」「どちらかといえばはい」と回答した子供が8割を超えている。実践教科活動が充実していることがうかがえる。

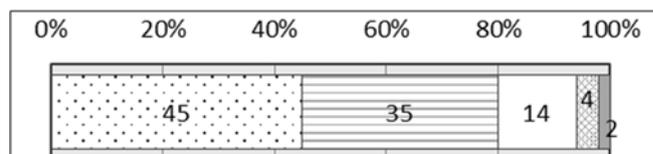
「授業で行ったことは、自分の生活に役立つ」



この質問に対して「はい」「どちらかといえばはい」と回答した子供が8割を超えている。今後も児童が実生活の中で学びのよさを実感できるような活動づくりを進めていく。

### ③ 実践道徳に関するアンケート項目

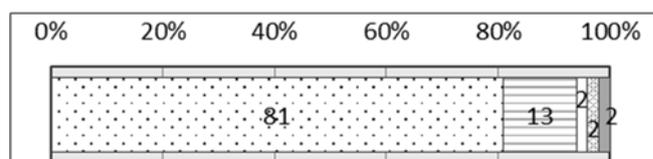
「学級の友だちと話し合うことで、自分の考えを見直したり、新しい考えをもったりする。」



この質問に対して「はい」「どちらかといえばはい」と回答した子供が8割を超えている。子供は話し合いを通して、自分を見つめ、自分の考えを見直したり更新したりしていることがうかがえる。

### ④ 集団活動に関するアンケート項目

「学校の友だちとたくさん活動したり、遊んだりする」



この質問に対して「はい」「どちらかといえばはい」と回答した子供が9割を超えている。学級の活動や全校での集団活動の充実により、多くの友だちとの関わりが生まれていることが回答からうかがえる。

子供の活動の様子やこのアンケート結果などから、次のことが読み取ることができ

る。創造活動では、子供は自分の思いや願いを十分に発揮しながら、自ら学びをつくり深め、「今」を充実させ自分の生き方につながる考えをつくり、つくり変え、つくり続けていたといえる。さらに、表現の仕方そのものに関心をもったり、その子らしい探究が広がっていったりした子供も見られた。中核となる創造活動の充実は、子供が他の教育活動との関連を自然な形で図ることができ、子供自ら創造活動での経験をつなげようとするに対して効果的であった。今後も実感を伴う体験を通して子供が自ら学びを広げ深めていく教育活動をつくっていくことが重要である。

実践教科活動では、その教科の目標を実現するとともに、学びを生活とつなげたり、自らの創造活動との体験とつなげたりしながら、学びをつくっていた。また、教科ならではの知を確かなものにするのができた。全ての児童が「学校に来るのが楽しい」と言えるような学校を目指すとともに、授業の充実を図っていく。

実践道徳では、子供たちは、深く考え、自分の中の道徳的な価値観をつくり、自分の生き方について考えていた。また、自分の考えを友達に伝え、考えを確かなものにしていくのができた。実践道徳を通して自らの意志で行動・判断しながら、よりよい共同体を営む人間としての生き方をつくっていく教育活動を今後も充実していく。

集団活動では、子供が自分の思いや願いを活動に反映させ、他者とともに楽しみながら自らの生き方について考えていった。また、創造性を発揮し活動に意欲的に取り組み、

集団の中で自分を生かすことができた。集会活動だけではなく、プロジェクト活動やサークル活動などの充実を図っていく。

## 2 教師への効果

### (1) 4つの教育活動を通して、子供たちに3つの資質・能力が育まれたこと

教師アンケートでは、これからの子供たちに必要となる資質・能力の育ちについての質問に対して95%以上の教師が肯定的な回答をしている。このことにより4つの教育活動を通して、子供たちに3つの資質・能力が育まれたことが見て取れる。

#### ① 経験を結び付けながらアイデアを生み出す力に関して

「子供は自らの道筋と歩調で知識や技能をつくり変え、ものの見方や考え方を広げていますか」という質問に対して、95%が肯定的な回答をしている。

#### ② 部分だけでなく全体を見渡して自らの意思で行動・判断する力に関して

「子供は自らの意思で行動判断しながら道徳的な価値観をつくっていますか」という質問

に対して、95%が肯定的な回答をしている。また、「子供は『人・もの・こと』と一体となりながら、新たな自分を見付けたり、行動したりしていますか」という質問に対して、95%が肯定的な回答をしている。

#### ③ 他者と協力しながら実感の伴う解を探る力に関して

「子供は様々な集団との関わりにより、新たな自分を見出していますか」という質問に対して、89%が肯定的な回答をしている。

### (2) 「感性」を働かせる教育活動の具現を目指しながら、教師が自身の教育観を見つめ直したこと

「感性」を働かせている子供の姿をありのままに捉えようとしたり、よりよい「自分」をつくっている子供一人一人を評価しようとしたりし、「感性」を働かせる教育活動の具現を目指してきた。このような学習指導の過程において、教師は自身の教育観を見つめ直した。それが「感性」を働かせる教育活動のよりよい構想・展開につながった。

### (3) 創造活動を中核に、子供の学びを広げ深まる教育活動を展開したこと

創造活動を中核にした教育活動により、多くの子供が今日の活動を楽しみにしながら登校していた。教師は子供の学びを広げ深めるような教育活動を構想し、子供とともに各教育活動を繰り広げていった。時に、子供自ら学びを広げ深める場面も見られたことから、創造活動を中核に据えることは、教師にとっても子供にとっても教育活動の充実につながるということが明らかになりつつある。

## 3 保護者等への効果

「創造活動」では、保護者ボランティアを要請するなど、保護者との協力によって活動をつくり出している。その際、どのような子供を育みたいのかをしっかりと説明したり、子供の学習活動の様子を見てもらったりすることで、当校の教育に関する理解が深まっている。また、保護者アンケートには、子供たちの具体的な資質・能力の育ちにつながる記述が見られ、子供の姿から本校の教育活動への理解が深まっている。

保護者アンケートからは、これからの社会を生きていく子供たちに求められる3つの資質・能力についての記述、「感性」についての記述、創造活動を中核にすることの効果についての記述が見られ、おおむね当校の教育課程を肯定的に受け止め理解していることが分かった。

#### (1) これからの社会を生きていく子供たちに求められる3つの資質・能力を育むことについて

- ・実践家庭科の活動を通して、少しずつ料理のレパートリーが増え、生きていく上でとても大切なことを学んでいます。(5年生保護者)
- ・失敗を経験しながら調理することや友だちとつくることの楽しさに気づき、創造活動「ミラクルシェフ」の活動に夢中になっていました。家でも同じ料理を家族のためにつくったり、普段の家事を手伝ったりするようになりました。(5年生保護者)

#### (2) 「感性」に関して

- ・ヤギやヒツジたちとの活動を通して、お友だちと力を合わせてお世話をしたり、お互いの気持ちを出し合って、自分たちで方針を決めたりととても貴重な体験をたくさんさせていただいています。(1年生保護者)
- ・家でも生きもののことを調べたり、いろいろな生き物をとったりしました。自分からやりたい、行きたい、調べたいということが増えて、学校で何をしようかと毎日楽しそうです。(3年生保護者)

#### (3) 創造活動を中核にすることに関して

- ・4月に創造活動の計画を先生に聞いたとき、目をキラキラさせて「あー楽しみだー!!」と叫んでいた姿がとても印象的でした。お家作りが始まり、ドリルを使い出したら、毎日学校に行くのが楽しくて仕方がない!という様子でした。(2年生保護者)
- ・以前からつくりたかったツリーハウスを今年度里山で実現できることになり、毎日ワクワクしながら過ごした1学期でした。(4年生保護者)

### Ⅲ 研究実施上の問題点と今後の課題

#### 1 感性を働かせることについて

4つの教育活動において感性を働かせている子供の具体的な姿を集積するとともに、それらを活動の目標に照らし合わせて分析・検討し、感性を働かせることと3つの資質・能力の獲得との関係について検証していくことが必要である。

#### 2 創造活動を中核に据えたこと

創造活動で生まれた課題がそのまま他の教育活動に生かされることもあれば、他の教育活動での学びが創造活動に持ち込まれることもある。各学年における創造活動と実践教科活動の関連、創造活動と実践道徳の関連、創造活動と集団活動の関連について実践を集積していくことで、創造活動が中核となり得ることについて検証していく必要がある。

#### 3 4つの教育活動について

##### (1) 創造活動について

今年度の活動公開やその後の事後検討、集積したレポート、全体の協議等から、昨年度に設定した「創造活動の目標」「各学年の目標」「創造活動の特色」「構想・展開する上で大切にしたいこと」については、さらに実践を重ねる中で、適切なものにしていく必要

がある。今年度、創造活動における子供の創造的な姿を整理することを試みた。今後も継続して取り組んでいく。

#### (2) 実践教科活動について

「探究」については、「探究」を「試行と思考のサイクル」「実感を伴いながら『知識』をつくり上げる過程」「子供が自ら文化的価値に迫ること」と捉えたが、さらに実践を重ねる中で検討していくことが必要である。

#### (3) 実践道徳について

自らの生き方についての考えを深め、実践意欲と態度を養うために、活動の内容や、自分を深く見つめるための道徳的な問い等について今後も考えていく必要がある。

#### (4) 集団活動について

他者と関わりをつくる子供の姿を見取り、子供の姿の具体を言葉にししながら、活動をつくり、つくり変えていくこと、自己を生かす能力とはどのような能力なのか、各学年の発達特性を鑑み、各学年の姿を言葉にして具現していくことが必要である。

### 4 目標の明確化を図ったことについて

これからの社会を生きていく子供たちに求められる資質・能力と、各教育活動の目標との関係を整理し、3つの資質・能力に照らして各教育活動の目標の妥当性について検証していく必要がある。あわせて、各教育活動・各教科・各学年の目標を踏まえて、単元（題材）レベルの目標をどのように設定するのか、目標を踏まえた評価について検証していく必要がある。